

## サーチライト

〔『幽霊屋敷』から〕

A Translation of Virginia Woolf's "The Searchlight" from *The Haunted House* (1945)

坂本正雄 訳

translated by Sakamoto Masao

2006年10月6日受理

十八世紀に建てられた伯爵の邸宅は二十世紀にクラブに改装された。大柱とシャンデリアのついた大きな部屋。まばゆい灯りの下で食事をした後、庭園を臨むバルコニーに出るのは気持ちのよいものだった。木々は青々と茂っていた。月が出ていれば、栗の木々にかけられたピンクとクリーム色の花形記章が見えたらう。でもその夜は月がなかった。とても暑かった。日中は晴れ上がった夏の日だった。

アイヴィミィ夫妻一行はバルコニーでタバコを吸い、コーヒーを飲んでいた。おしゃべりする労から解放するため、夫妻が骨を折ることもなく客をもてなすためであるかのように、光の筋がいくつも空をぐるりと回った。平和だった。空軍の演習だ。空中の敵機を探しているのだ。敵機のいそうな、空中の一点をさした後、光はまたぐうっと回った。まるで風車の羽があるいはまた巨大な昆虫の触角のようだった。それから屋敷の石壁を青白く、それから栗の木を照らし出した。栗の花が白く浮かび上がった。それから突然光はバルコニーに当たり、ちょっとの間、円盤が明るく輝いた。たぶんそれはハンドバッグに忍ばせた鏡だったろう。

「まあっ。」アイヴィミィの奥さんは大きな声を出した。

光は通り過ぎていった。また闇になった。

「わたしが見たものがなにか、みなさんにはわからなくてよ。」奥さんは付け足した。当然みんなは当てようとした。

「違うわよ。」奥さんは言った。誰にもわからなかった。わたしだけが知っているわ。わたしにしかわからないわ。だってわたしこそ、その人のひ孫ですもの。その人がわたしにその話をしてくれたの。どんな話ですって。気に入ってくれるなら、話してみようかしら。芝居までまだ時間があつた。

「でもどこからお話ししたらいいかしら。」奥さんは考えた。「一八二〇年だったかしら、きっとその頃だわ。曾祖父が子供だった頃よ。わたしの方こそ今は若くはないけど。」そうよ、でも元気はいいし、端正だわ。「それでわたしがこどもの頃、もうかなり歳を取っていたわ。その頃にお話ししてくれたの。とてもすてきな人

だったわ。くしゃくしゃの白い髪、青い眼をした。子供の頃は、きっときれいな子だったんだわ。でも変わっていたの。暮らしぶりを考えれば、それも当然だったんだけど。名前はコーマーで、落ちぶれてしまってたわ。もともと家柄はよかったのよ。ヨークシャーに土地も持ってたの。でも曾祖父が子供の頃には塔だけが残ってたの。家はただの農家で、畑の真ん中に立ってた。十年前にわたしたち見について、調べたわ。車を降りて、畑を歩かなくてはならなかった。家までの道もなかったのよ。それっきりで立っていて、草が門まで茂っているの。ひよこが、部屋を出たり入ったりして、そこらあたりをつつき回していたわ。もう廃墟だった。そうそう、塔から突然石ころが落ちてきたのね。」奥さんは一息ついた。「そこにみんな住んでいたの。」奥さんは続けた。「老人と女の人、それから少年だった曾祖父。女の人というのは奥さんでも、少年の母親でもないの。農家のただの人手よ。老人が雇い入れた、住み込みの女なの。奥さんが亡くなったときにね、誰も訪れなくなった、たぶんそれがもうひとつの理由ね。それから廃墟になってしまったことのね。でもドアに盾形紋章がかかっていたわ。それから本。古い本で、かびが生えていた。曾祖父はなにごと本で勉強したの。古い本を読み読みまくった。ページの間から地図が垂れるのもあつたの。曾祖父はそう話してくれたわ。塔のてっぺんまで本を引っ張り上げたんですって。ロープがまだ残っていた。壊れた階段もね。窓のところには、底の抜けた椅子もまだあつた。窓がぱたぱた開いて、棧が壊れていた。それからヒースの原野が何マイルも何マイルも見えたわ。」

奥さんは塔に今登って、開いた窓から外を眺めているかのように、ことばを止めた。

「でもね、望遠鏡は見つからなかったの。」奥さんは言った。後ろの食事室から皿の音が一段と大きく聞こえてきた。でもアイヴィミィの奥さんはバルコニーに立って、望遠鏡がないということで、とまどっているようだった。

「どうして望遠鏡なの。」誰かが聞いた。

「どうしてって。もし望遠鏡がなかったら、わたしはいまこうしてここに座ってないのよ。」奥さん

は笑った。

そうして、中年の奥さんは確かに今そこに座っているのだった。肩に青いものをかけて、元気よく。

「あるはずだったのよ。だってね、老人たちが寝てしまったあと、毎晩塔の窓のところに座って、望遠鏡で星を見ていたって、曾祖父は言っていたもの。木星、牡牛座、カシオペアなんか。」奥さんは木の上に見え始めた星に向かって手を上げた。闇が濃くなっていった。サーチライトは輝きを増したようだった。空を駆け、ここそこに止まり星に向かって光を投げた。

「ほら、あそこよ。星は。」奥さんは続けた。「それからあの人、子供だった曾祖父はこう思ったのよ、『あれは何なんだろう。どうして存在しているのだろう。そしてぼくは何者なのだろう。』話しかけるものもなく、ひとり座って、星を見ながら思ったの。みんな同じようにやるわよね。」

奥さんは話をやめた。みんなは木々の上に出てきた星を見た。星は変わることなく、未来永劫に続く存在のように思えた。ロンドンの喧噪は遠くに沈んだ。百年の月日も些細なものに思えた。少年と一緒に星を見ているようにみんなには思えた。原野を見渡す塔の上で一緒に星を見ているように思われた。

そのとき背後から声がした。

「その通りだよ、フライデー。」

みんなは振り返り、身体の位置を変えた。バルコニーの上にまたつき落とされたようだった。

「ああ、でもそんなことを言ってくれる人は曾祖父にはいなかったんだわ。」奥さんはつぶやいた。その二人連れは立ち上がり、歩み去った。

「曾祖父はひとりぼっちだったの。」奥さんは始めた。

「ある夏の、晴れた日。六月よ。暑さの中に何もかもがじっと突っ立っているような夏の日よ。ひよこたちは庭でえさをつつき、老馬が小屋で足を踏みならし、老人は酒を飲みながら、うつらうつらしている。雇われ女は流し場で桶を洗っている。たぶん石ころが塔からひとつ落ちたのね。まるでその一日が終わることがないように思えた。そして少年には話し相手がない。何をすることもない。全世界が自分の目の前に広がっている。原野が上がったり、下がったりうねっている。空が原野と重なる。緑と青。緑と青がずっとずっと。」

薄明かりの中、アイヴィミィの奥さんが、あごを手に載せ、バルコニーにもたれているのが見えた。まるで塔の上から原野を見渡しているようだった。

「原野と空以外何も無いのよ。原野と空だけ。ずっと。」奥さんはつぶやいた。

それから奥さんはまるでなにかを揺すって位置を変えるかのように、身体を動かした。

「でも望遠鏡越しに大地はどんなに見えるのかしら。」奥さんは言った。

奥さんはまたなにかをくるっと回すかのように、指

で小さな動きをすっとして見せた。

「曾祖父は焦点を合わせたの。地上にあるものに。地平線にある黒い木の固まり。ちゃんと見えるように焦点を合わせたの。木々の一本一本。鳥、飛び上がったり、降りてきたり。木々の間から立ち上る一筋の煙。それから下の方下の方へと。(奥さんは眼を下へ向けた。)家があった。木々の間に家があった。農家よ。煉瓦がひとつひとつ見えた。ドアの両側に桶がひとつずつ。青とピンクの花が入れている。たぶんあじさいだ。」奥さんはことばを止めた。「それからひとりの女の子が家から出てきた。頭になにやら青いものをつけている。そして立ち止まる。鳥にえさをやっているのだ。鳩だ。羽をばたつかせて女の子のまわりに飛んでくる。それからほら、男だ。男だ。男が角を曲がってくる。女の子を腕に抱える。ふたりはキスをする。キスをしたのよ。」

アイヴィミィの奥さんは腕を広げ、自分が誰かとキスをしているかのように腕を閉じた。

「男が女とキスをするのを曾祖父が見るのはそのときが初めてだったの。望遠鏡で。原野の向こう何マイルも離れたところだとしても。」

奥さんはなにかをぐっと前に突き出した。たぶん望遠鏡なのだ。そして背筋を伸ばして座った。

「そうして曾祖父は階段を駆け下りたの。畑を駆け抜け、道を駆け下り、本道に出て、森を抜けた。何マイルも何マイルも走ったわ。そうして星が木々の上に輝き始める頃、その家に着いたの。ほこりまみれになって、汗をだらだら流して。」

奥さんは言葉を切った。まるで目の前に見えているようだった。

「それから、それからどうしたの。なんて言ったの。女の子はそれから。」みんなは知りたがった。

一筋の光がアイヴィミィの奥さんに当たった。まるで誰かが望遠鏡のレンズの焦点を奥さんに合わせたようだった。(空軍だ。敵機を探しているのだ。)奥さんは立ち上がっていた。奥さんは頭に青いものをつけていた。びっくりした顔で、既に手を挙げていた。まるで戸口に立っているかのようにだった。

「女の子って。その子はわたしの…」奥さんはためらった。まるで「わたしのことなのよ」とでも言いそうだった。でも奥さんは思い出し、気を取り直し、「曾祖母なのよ。」

奥さんは振り返り自分のマントを探した。すぐ後ろの椅子の上だった。

「でももうひとりの男はどうなったんだい。角を曲がってきた男だよ。」みんなは尋ねた。

「男ね。その男は。」アイヴィミィの奥さんはかがんで、マントをあわてて手に取りながらつぶやいた。(サーチライトはもうバルコニーを照らしてはいなかった。)[たぶん消えたのよ。]

「あちこちに灯りが当たるだけなのね。」奥さんは自分のものをまとめながら言った。

サーチライトはもう通り過ぎていた。それは今バツ

キングダム宮殿の上の何もない上空を照らし出していた。みんなが劇を見る時間になっていた。